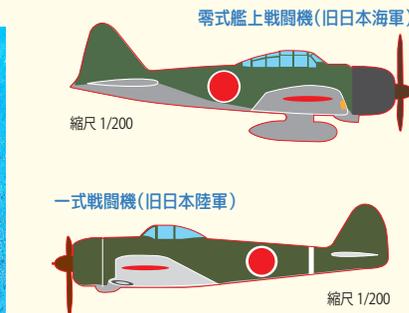
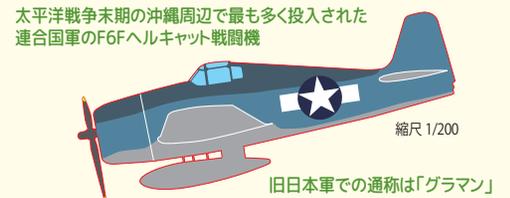


## かるうじて残る太平洋戦争の爪跡 岡前小の裏門・海底のプロペラ

太平洋戦争の末期、旧日本陸軍が、昭和18年12月3日から島内や周辺の島から4180人もの人夫を集め、突貫工事により翌19年6月までに浅間陸軍飛行場を完成させます。九州から沖縄へ向かう陸軍戦闘機や特攻機などの中継・補給・修理、あるいは徳之島周辺や沖縄で空戦ののち、傷ついた機体が旧日本陸軍・海軍機ともに不時着するための飛行場でした。また、岡前小学校は飛行場建設に駆り出された人夫の宿舎として利用され、完成後は奄美守備隊の兵舎として利用されました。一方、連合国軍は空母艦載機により、旧日本軍の軍用機のほか、飛行場や旧日本軍が利用する施設や集落などに対し、爆撃や機銃掃射などの攻撃を加えました。戦争の爪痕を残す遺跡は多くはありませんが、岡前小学校の裏には傷ついた門柱、天城集落の喜治海岸沖(新徳之島発電所の沖)には、ダイビングスポットとなっているゼロ戦?のプロペラが残っています。いずれも状態は良好でなく、記録や保存をするならば、対策を急ぐ必要があるでしょう。



太平洋戦争の戦跡は、いずれ100年を超え年月を重ねていけば、文化財としての価値が出てくるけれど、保存が大変なんだ!



喜治海岸沖に沈むプロペラは、より沖合にあったものをダイビング事業者が浅い海域まで移動させてきたものだと思います。通称「ゼロ戦のプロペラ」と呼ばれていますが、写真をもとに調査してみました。3枚プロペラの下に見える部品は、当時の航空機で標準的な星型エンジンの一部で、7気筒ぶんのうち4気筒が残っています。また、放射状にのびる棒は、吸排気弁を動かす部品で、その取付角度から複列14気筒(7気筒を前後に合わせた構造)の中島飛行機製、栄エンジン・シリーズだと思われます。旧日本軍と米軍の記録にある、徳之島の近海で墜落したり不時着した航空機のみならず、3枚プロペラと栄エンジンを搭載しているのは、あの有名な**零式艦上戦闘機**、いわゆるゼロ戦と、**一式戦闘機**、準でした。それら2機種は、同時期に開発されていたため、プロペラ、エンジンはほぼ共通だったため、残念ながらそれ以上の判別はできませんでした。

もっと情報が見られる電子版はこちら



ちなみに、米海軍の主力戦闘機F6FヘルキャットやF4Uコルセアのエンジンは、複列18気筒を採用していました。

編集：天城町教育委員会 具志堅亮、山田文彦